みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

中国の「国境文化」の人類学的研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 誠之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5668

資料紹介

ミリベル「ライチャウ視察報告書」（1908年）

武内房司（学習院大学）

【解題】

以下に訳出したのは、仏領期の1908年、白タイ族の根拠地ライチャウを視察に訪れた視察官（Inspecteur des services civils）ミリベル Marie Joseph Uldéric de Miribel（1858 - 1911）の報告書である[(1)]。ライチャウは、1890年、白タイ族の首領デオヴァンチがフランスに投降して以降、クワンダオとしてシプソンチャウタイと呼ばれるヴェトナム西北地区で強大な権限を保持していた。ミリベルは、ランソン（諒山）において「匪賊」鎮圧に参加した後、1890年、軍人から行政官に転じ、インドシナ各地の理事官を歴任した（Brebion, 263）。

ミリベルに同行したのはトンキン理事長官付補佐官であったボスク Jules Bosc であった。ボスクは植民地学校でヴェトナム語を学び、トンキン刑事委員会のメンバーとして海外に亡命中の潘佩珠や尊室説ら反仏運動指導者に連なるヴェトナム人を追跡していた経験を持つ辣腕官僚であった（Le Failler, 182-186）。

ミリベルとボスクがライチャウに派遣されたのはシプソンチャウタイにおいてクワンダオ（管道）として広範な権限を与えられていた白タイ族首長デオヴァンチ Đèo Văn Trì（刁文持）が1908年3月に死去し、にわかにクワンダオ統治の存続が問題となったためであった。ソンラの理事官であったモンペイラは、デオ氏の数々の職権濫用・不正を糾弾してクワンダオ職の廃絶を求め、インドシナ総督府もまたそうした意見に傾いた。

これに対し、デオ氏側ではデオヴァンチがフランスに投降する際に仲介者となったオーギュスト・パヴィに支援を求めた。パヴィはデオヴァンチの死の三日後には植民省大臣のミリエス・ラクロワに書簡を出し、デオ氏の擁護に回ったのである。パヴィは2年間にわたってデオ氏宛の書簡がモンペイラらによって没収されてきたことを問題にし、独立した官員による調査を求めたのだった。植民省の命令を受け、インドシナ総督は視察官ミリベルを派遣することを決定した。しかし、ミリベルのデオ氏支配の評価は基本的にはソンラ駐在理事官モンペイラとそれほど変わらず、報告書のなかで繰り返しクワンダオの世襲統治に代わりフランス人行政官による省制への移行が主張されている。デオヴァンチの葬儀に集まった多くのデオ氏のメンバーは村落首長たちから聞き取りを行い、ミリベルは省制移行に必要な財源の可能性、交通路の整備によるライチャウ地域の振興策などをこの報告書のなかで詳細に論じており、20世紀初頭のヴェトナム西北地区におけるデオ氏統治を知るうえで貴重な史料といえる。そこからは、タイ族の地域権限を剥奪していこうとする植民地側の意図とそれに対抗しできるだけ権限を保持していこうとする在地タイ族領主層の思惑を読み取ることができるのである。訳出にあたっては、フランス国立文書館海外館（Archives Nationales d'Outre-Mer, Aix-en-Provence）に収められているトンキン理事長官文書（RST-AF/56475）所収のテキストに拠った。

ミリベル「ライチャウ視察報告書」（1908年）

1908年4月1日付けの貴書簡14号及び4月6日付けの決定510号の指示を実行するために、同日4時半、鉄道に乗り、私の補佐として第二級行政官ボスク氏、ラオカイの知州でタイ語通訳を担当するファム・ラー・ロン氏、首席通訳秘書官グエン・ヴァン・ファン氏をともない、ハノイを出発した。

我々はヴィエッチに宿泊した。4月7日午前、視察団はチョボに向かうボートに乗り、午後6時、同地に着いた。翌朝8時半、カヌーで黒河の遡航を開始した。

我々の旅行はすばらしい条件のもとで実施された。

昼、我々はスイユットで小休止をとった。そこで我々はこの地で商業を営む カット氏とホアビン省枚州の知州を待った。私は多大の関心を持ってすでに重要かつ必要となっている市場を訪れたが、スイユットのルートの建設が完全に終了し、ラオスートンキン間の主要な商業動脈となる際には、かなり大規模な発展が見られるだろう。

4月10日午後3時、我々はヴァンイエンに到着した。そこで郵便・電報受信員のエメリ氏の出迎えを受けた。エメリ氏は臨時にソンラ理事官代理の職を担っている。彼は我々を郵便電報局と市場とに案内し、ヴァンイエンの知州とこの地区の主要な有力者を紹介してくれた。これらすべての現地人当局者に尋ねたが、この地区ではデオヴァンチの影響力はまったくなく、彼の死は住民の間になんらの反響を呼び起こさなかったという。

知州は ボスクにこの州に今世紀に入り設立され、地域のセンターとなっている小学校を見学してほしい旨を表明した。

エメリ氏はきわめて熱心であり、我々に旅行の便宜を与え我々の視察を完遂させるためにあらゆる努力を払ってくれた。

11日5時早朝、我々は再び旅の途についた。

12日午前11時、ヴァンサイに到着した。そこではグレヴィ氏の指揮のもと、インドシナ冶金・鉱山会社によって銅山の開発が進められていた。時間的理由で開発の様子を詳細に視察することは出来なかったが、幸いにもその実際的な努力、さらにまた所長と従業員との間にある親切さ・誠実さに敬意を払うことができた。私は同様の行動方針が将来、この事業の繁栄にとって最も幸福な成果をもたらすであろうことを疑わない。

午後2時、我々は旅を続け、14日午後3時、ターシャ

ンに着いた。ソンラの理事官モンペイラ氏が待ってくれていた。彼はマイソンの知州と地域の当局者を紹介してくれた。

デオヴァンチの甥かつ通訳で、デオ一族より派遣されたカムハン氏が同様に我々を出迎えていた。

午後3時、我々は再び旅の途につき、翌日15日の午後4時、ターブに到着した。そこはヴァンブの理事官府がソンラに移って以来、ソンラ・サムヌア・ライチャウ等地域向けに物品を発送する倉庫があった。この倉庫を担当するタイ語の通訳は、同時に郵便や貨物のための業務も担っている。

16日の1時から6時半にかけて、ターブを出発し、ヴァンブの旧理事官府の前を通過したが、そこには壁面しか残っておらず、有用な資材はすべてソンラに移管された。

18日の午後、クウィンニャイ（瓊崖）に到着した。同州の知州はデオヴァンチの遠い親戚であり、4月16日に始まった葬儀を補佐するためにすでにライチャウに戻っていた。

21日午前8時、ライチャウに到着した。我々はチョボからライチャウまで、13日間カヌーに乗る旅を遂行したのだ。これは通常のこの季節の旅程よりも2日ほど早い。

着岸すると、ディエンビエンフー理事官府長官のラリエ氏、ライチャウ郵便局臨時支局長のバザンジェット氏、物故したクアンダオの家族のメンバー全員の出迎えを受けた。ソンラ理事官はこれらの人々を紹介してくれた。

これらの当局者にいくつか感謝の言葉を伝えた後、ただちにクワンダオの邸宅に向かい、デオヴァンチの亡骸に弔意を示し、その子息に総督並びに理事長官の哀悼の意を伝えた。

その後、我々はただちにわれわれの居所に投宿し、本視察の目的である諸問題の研究を開始した。

ライチャウ・クワンダオ地区の政治情況
デオヴァンチおよびその一族によって行使される影響力と権威

ここで、黒河流域がペヌカン将軍によって平定された後に、ライチャウ支配区が創設された経緯を歴史的に説明する必要はないだろう。

頗る鷹揚な管理のもと、軍事当局は、ディンビエンフー（Điện-Biên Phủ 奠辺府）からフォントー（Phong-thô 豊收）にいたる我々の領域内においてクワンダオが自由な行政を行使するのを許してきた。ヴァンブー（Van-Bu）省が行政権力側に復帰した際にも、莱州の軍営は縮小され、現地人部隊によって置き換えられることもなく、フランス当局の代表はクワンダオの承認と同時に姿を消したのである。

その結果、この官僚（クワンダオ）の個人的な影響力は弱まるどころか強大となった。そのいきすぎにブレーキをかけるような効率的なコントロールに失敗し、その権力はほとんど無制限なものとなり、クワンダオは地区のすべての勢力をおのれの利益に集中させることで、実質的にライチャウに封建体制を敷くことができた。

すこぶる行動的、エネルギッシュであり、おのれの権威に愛着を持つデオヴァンチは、強力なメンバーの権力欲を緩和させ、たいした抵抗もなしにおのれに従わせることができたのである。不幸にも、デオヴァンチは数年前から心臓病を病み身体が弱りだすと、彼の兄弟や長男による収奪が強められた。その結果土地のタイ族に悪感情を抱かせ、クワンダオの個人的な権威に重大な損害をもたらしたのである。

このようなクワンダオの権威の衰えは、まず、黒タイ族の特徴的な運動によって表面化した。彼らはクワンダオの監視から免れようとして自発的に我々に接近してきたのである。

デオヴァンチは自分がもはや黒タイ族の支持を取りつけることはできないことを理解しており、弟のカムフイがディエンビエンフー知州の職から解任され彼のもとに送り返された際にも、そしてまたディエンビエンフーを中央行政区に昇格させソンラに併合したことに対しても、いかなる形によっても反対しなかった。この時以来、デオヴァンチは、白タイ族が黒タイ族が始めた運動に続くのではないかと恐れ、ますます疑いぶかくなった。この年老いた首長の晩年を不安がらせ苦しめることのないよう、我々も彼に対してまたます多くの忍耐を示したのであった。

当初から、こうした情況はソンラの理事のよく観察するところであり、彼はたえず理事長官に報告してきた。一方、クワンダオもまた、実質的な力を持つ省の長官がさらに、デオヴァンチの死後は、デオヴァンチ一族のために存続させてきた優待的な政治体制の廃止を強く勧めていたことを知らないわけではなかった。このような見通しは、晩年のクワンダオの大きな関心事であった。それ以来、ソンラの理事官が彼に示したとする敵意に対し、繰り返し不平が述べられたのだ。

モンペイラとデオヴァンチとの間に存在する関係の特徴

デオヴァンチ一族のメンバーに対し、彼らなりのモンペイラ氏の態度に対して抱きうる不満を明かしてほしいと要請した時のことである。彼らは私にこう答えた。クワンダオに対しとりわけ敵対的な役人が一人がライチャウにいたのですが、彼はモンペイラ氏の信任を得ていたのです。この役人はモンペイラ氏に対しデオヴァンチに対するでたらめな報告を行ったのです。より正確にいうならば、ソンラの理事官はそれを確かめることなく真に受け、理事長官に付託し、クワンダオの忠誠・デオ氏一族のフランス支持に対する信頼を傷つける結果となったのです、と。これがクワンダオの親族たちが私の前でしてくれた唯一の議論である。私はこの点にかんし真面目に話してくれるよう強く申し入れていたのであるが。

デオヴァンチ一族との会談

莱州に到着して翌日、私は一族の会議を呼びかけた。

デオヴァンカン氏（デオヴァンチの長男）。

デオヴァンタオ氏（通称カムラム、クワンダオの兄弟で、もと文炎州知州。トンキン政府より現職時同様に〔給与が〕支払われているが、彼の圧政を受けた住民によって同州を追い出された後、現在そのポストへの就任は禁じられている）。

デオヴァンチャン氏（通称カムラー、クワンダオの兄弟で、特に行政職にはついていない。デオ氏一族の中では最も知的な人物だが、最も閉鎖的かつ危険な人物であり、我々に対して最も敵対的である。デオヴァンチは彼を助言者・事務官としたが、彼にはいかなる直接的な権力を与えようとはしなかった）。

デオヴァンフイ氏（通称カムフイ、クワンダオの兄弟で、解職された元奠辺府知州、アヘンの乱用で無気力となった二流の人物。権威も活動もなく、何ら影響力を持たない）。

継承問題に対するデオヴァンチの最後の希望

最初に彼らに一族の首長を悲しませたデオヴァンチの逝去に対する総督並びに理事長官の弔意を表明した。続いてデオヴァンチの二通の書簡、すなわち一つはパヴィを介して送られた植民省大臣宛の書簡、もう一つはコーチシナ長官のボヌール宛の書簡であり、その中で明確にフランス政府に対して、ライチャウのクアンダオの継承者として長男のデオヴァンカンに継承させることを表明した。

そのうえ、クワンダオ（デオヴァンチ）は、死の直前、継承問題につき、もう一つの希望を表明していた。これについては後に述べる。

個人的に、そして集団としての質問を受け、一族のメンバーはデオヴァンチがつねにかつ公的にデオヴァンカンを後継者として指名していたことを表明した。

私は、デオヴァンチが死去した際にライチャウを離れていたモンペイラ氏に宛てたクウィンニャイ州知州の書簡をふまえて、この質問をしたのであった。このタイ族首長がソンラの理事官に語ったところによれば、死去の数時間前、通訳のカンと長男をそばに置いて、クワンダオは知州に弟のカムラーをクワンダオに、そして長男のデオヴァンカンをライチャウ知州に任命してもらいたいという希望を表明したという。彼はさらに、この決意をソンラの理事官に伝え、理事官からトンキン理事長官に報告してもらうよう依頼されていた。

これは地域の慣行と異なるものであった。さらにデオヴァンチが選択した方法は、彼がつねに細心の注意を払って一族の問題からいっさい遠ざけてきたソンラの理事官と連絡をとろうとするものであるだけに、すぐさまデオヴァンチの最後の意志というよりも、カムラーと通訳のカンの陰謀めいたものがあることに気づいた。彼らはクワンダオの長男は不安定な健康状態にあり、彼らの野心的な陰謀に抵抗することはできないだろうと考えていたのだ。

ライチャウにおける代表部の創設

私はまず、彼らが想像するようないかなる権限も帯びておらず、いかなる決定も、いかなる問題の解決もなしえないこと、私の任務は単にこの地域の政治・経済状況を調査し、統治者や住民の希望を記録しそれを理事長官に伝え、同長官が有益と判断する施策をとれるようにするだけである。したがって、私は、自分があなたがたにそうそうするように、率直にすべてを語ってほしい、それがあなたがたにとって実際の利益となるのだから、と告げた。

さらにもう一点、彼らにこれ以上以下のことを知らしめないままにしておきたくはなかった。ヴァン・ブを通過する際、ライチャウを行政上のセンターに昇格させる理事長官の政令を受け取っており、この決定を遂行するにあたり、フランス人の官吏がまもなくやってきてこの代表部を管掌することを付け加えた。

行政当局がこのような方法をとったのは、我々の側に対するデオ氏一族の忠誠心に疑念が生じたためでは決してなく、そのねらいは以下のとおりであると告げた。

デオヴァンチの一族は中国で起こっている革命運動の渦中にあり、武器・弾薬を確保するために革命の主導者となっている者がいる。何度も中国政府はフランス政府に対し、我々インドシナの植民地がトンキン国境地帯で武器の密輸に便宜を与えているようだと通告してきた。国境地帯の中国人官員は主要な武器輸送ルートとして、ハロン湾のモンカイ、鉄道を利用したラオカイ、黒河を利用したライチャウを通告してきた。

こうしたはっきりした通告を受け、中国と友好関係を維持する見地から、清朝政府に対し、国境地帯にヨーロッパ人の官吏を配置し、不断に現地人首長に対する監視を行っており、清朝官員の主張には根拠がない旨、返答した。これが、ライチャウに行政上のセンターを創設する主要なねらいである。

もはや彼らに関税総局が黒河をつうじてトンキンでもアンナン北部でも大規模なアヘンの密輸が行われ、財政に大きな損害をもたらしていることの確証を得ていることを隠す必要はない。クワンダオが生きている間、我々は彼を動揺させることなくかつその悪事を増長させないよう彼の自由にまかせてきた。しかし、今や政府はもはやこうした状況を維持し財政に損害を与えるのを許す理由はない。かくしてこの非合法アヘンの輸入に向けたあらゆる手段が禁止される決定がくだされた。そもそも私は関税総局がアヘンの消費にかんして住民を苦しめるばかりか、大規模な密輸を抑制するために厳格な手段を講ずるであろうとは思っていなかった。これが、ライチャウにヨーロッパ人官吏を置こうとした理由の一

つであった。

第三に、行政当局はチョボ・スイユット・サムヌアを通ってトンキンとルアンパバーンを結ぶ道路を建設しようとしているが、高地ラオスの商業上の通過貨物の大部分はこの新たな道路によって黒河を抛棄することになるだろう。しかし、黒河高地地帯の人々の生活を貧しくさせたくないので、理事長官はライチャウに代表部を設ける決定を下したが、この代表部は地域の住民と直接関係を持ちつつ、商業取引を増大させる見地から、この地域を雲南、ラオス北部まで結びつける商業道路の建設を検討することになろう。こうしてサムヌアを経由したトンキンからラオスに向けてのルートがもたらす輸送の減少も補われるだろう。

デオヴァンチの長男デオヴァンカンは発言のなかで、父も一族のメンバーも武器やアヘンの密輸に手を染めたことはなく、それらの輸送に便宜を供与したことも、それらの輸送団がライチャウを通ったこともない、と強く主張した。彼は一族と自分自身がつねに我々の側に忠実であり、父がそうしてきたように与えられる命令や指示を遂行することを約束し、したがってライチャウに保護領に大きな財政負担をもたらすことになる代表部を設置することはあまり役に立たないように思われると述べた。

私は彼に、所見は根拠を欠いており、当局の方針はこれまでの事実に基づいたものであるゆえ、理事長官は決定を覆すことはないだろう、と答えた。ソンラ理事官に直属する代表部を創設することが彼らに最も不快な印象を与えたことは容易に見て取れた。さらにつけ加えれば、ライチャウに到着するまでの私の観察によれば、ライチャウの問題を解決するにはほど遠いやり方では、ソンラ理事官とクワンダオの一族との緊張を増大させることになると確信した。

デオヴァンチの一族は自らのくびきを脱した黒タイ族に対して、表には出さないが明確な反感を抱いている。私の前で彼らは黒タイ族が偽善的な親切かつ従順な態度によりソンラ理事官の寵愛を独占していると非難した。それゆえ、黒タイ族が白タイ族に対して同情をいだくことはほとんどなく、つねにモンペイラ氏に彼らに対する誹謗中傷を語るのである。その結果、この行政官は黒タイ族を優遇し、ライチャウのクワンダオを嫌い、黒河流域で行われるすべてのとがめられるべき行為を非難するのである、と。

この主張は完全に誤ったものであり、そのくびきを脱した黒タイ族に対するクワンダオの一族側の敵意を指摘しないわけにはいかない。

私はこう付け加えた。白タイ族が黒タイに対し不信の念を抱き、いわれるようなソンラ理事官による後者への優遇があるとすると、理事長官に対し、ライチャウに行政センターを創設するだけでなく、独立した行政区を設立するよう進言することになろう。そこでは首長が白タイ族の住む地域の行政を担うが、高度な権限は与えられない。ライチャウのクワンダオ支配区はもはや行政センターではなく、理事官の監督のもとで自民族出身の首長による行政・裁判が行われる白タイ族の実質的な省となるであろう。

この方法を提案する前に、私は真摯な意見を出してくれるよう依頼した。

全員が一致して、厚意ある私の提案に謝意を示した。彼らは私の提案のなかに、政府が彼ら一族及び白タイ族に確かに大きな利益をもたらすことを見て取るだろう。

デオヴァンチ一族の実際の状況

私は彼らとともに彼ら一族の状況を検討した。私は、ライチャウ地域を領有した際に、クワンダオの一族は今日ほど多くはなかったことを指摘した。この一族がそれぞれの支派においてたえず増大しており、彼らの給与の支払いが軽減されたとしても、すべてのメンバーは多かれ少なかれ地域の負担となっている。ライチャウは資源の限られた貧しい地域であり、その中心にグループとしてまとまっていることは彼ら一族にとっても貧窮化をまねく要因であり、支出を削減することに同意しなければ、疲弊した住民はついには反乱を起こすだろう。

それゆえ、彼らの利益を考慮したうえで、別な地点に農地ないし商業地を分割・創設する必要があるように思われる。それによって彼らはそれぞれの社会階層に見合った財産を保持したまま各家族の生活を維持することができるだろう。

バヴィ租界地問題に関するデオヴァンチ一族の意図

私はバヴィ租界地の件について言及したが、クワンダオも私が彼らに示した状況を気にし、保護領政府からこの租界地を手に入れ、一族の一部をそこに入植させ、ライチャウ地域の不十分な食糧を補うための農業開発を行おうとした。私は彼らに行政当局が好意的に見ており、協力を求めようとしているこのプロジェクトや問題を実現する意図があるかどうか、尋ねた。

彼らの答えはちんぷんかんぷんなものだった。

彼らがいうには、一族は当局が土地を寄贈してくれたことに変わらぬ感謝の念を抱いており、また、デオヴァンチはフランスに二人の息子を送りまだそこで学んでいるが、彼はこの土地を開発しこの租借地から利益を得ようとしていた、という。

デオヴァンチの一族は現在の体制を維持してもらうことを望んでいる

ここでライチャウに来てから強く感じたことを記しておかね

ばならない。突然ライチャウの中心部に現れる黒河の湾曲部をまわると、最終的な建物の性格をなす煉瓦造りのクワンダオの家々が現れる。そこからはっきりとクワンダオやその子孫たちにライチャウを抛棄する意図がまったくないと感じた。ヴァクルの報告を読んで、確信したことだが、この官僚との古い友好関係のために、クワンダオはデルタに下るというプロジェクトに賛同しているふりを見せただけであり、彼の意図は彼の供述とはまったく一致していない。おそらく、彼の兄弟たちの陰謀に邪魔され、彼は今、このやり方を棄てたのだ。彼は彼らの抵抗を受けねばならず、このプロジェクトを実行するだけのエネルギーも力も持たなかった。

デオヴァンチ一族のメンバーやそれに付随する地域の当局者との会話から、亡くなったクワンダオの息子や兄弟の意図が以下のようなものであることが明らかになった。

1° いかなる資格であれ、フランス当局の代表部がライチャウに設立されることは避ける。

2° 自らの利益となるように地域を治めるためにライチャウに集団としてとどまる。

3° 継続して旧体制を維持し、かつ、クワンダオが肉体的道徳的に衰えのために義務を果たせなくなっているにもかかわらず、すべての補助金を受領している。

我々の実際の政策はどうあるべきか？

これらの条件のもと、デオヴァンチは亡くなったが、今の時点で、武力を用いることなしにこの一族のメンバーを一掃することは不可能であろう。そのうえ、それは私にはよくない政策と思える。現在まで我々の恩知らずのやからに対する直接的影響力から距離を置こうとしている人々に目を向けることになろう。この恩知らずの主立った行動ときたら、我々に忠誠を誓った首長の親族のために働くことを理解しようとせず、かえってだめにすることなのだ。

我々にはたった一つの解決策しか残されていない。ただちに過去を廃することはできないからだ。すなわち、死去したクワンダオの兄弟たちの地域にある有害な政権を利用しつつ、徐々にそれを我々のものに変えていくことである。

ライチャウ省の創設に有利になるように
疆界を確定する理由

この目的を達成するために、今から、独立した行政区を創設する必要があると考える。そこでは首長はたゆみなくしかも性急になることなくこの一族に対して恒常的な監視が行われる。首長は住民をよく知り、住民の希望に満足を与え、かつ我々の側に惹きつけるために頻繁にその地域のさまざまな村を訪れることが必要である。

黒タイで成功したこの政策は同じように白タイ族でもうまくいくであろう。私は白タイ族とならばより速やかにその成果が生まれることを期待する。性格や気質の面で彼らは中国人により近く、黒河右岸の同じ種族（黒タイ族を指す〜訳者）よりもエネルギッシュかつ積極的であるからである。

私がまず抱いたこうした印象は、ボスク氏によっても同じように確認されている。

こうした理由から、私は、行政センターを設置するだけでは実際の政治的困難に対処するには不十分であり、すみやかに独立した省を創設する必要があると確信した。

純粋に行政的観点からみても、こうした解決をめざす理由はやむを得ないものであるといえる。以下にその主要な理由を掲げる。

代表部設置の問題点

行政センターの長として権限を行使するには不十分な官位しかもたない官員を置くことしかできない。古い慣習に従えばデオヴァンチの一族は常に賛成するが、そうでない場合はあらゆる事案に消極的な抵抗を試みるだろう。市場が閉鎖されてしまえば代表は地域で食糧の供給も受けることはできないし、遅かれはやかれすっかり意気消沈するか激昂せざるをえなくなる。この目的が達成されると、一族全体でその配置転換を促すために代表を訴えることもするだろう。

司法的な見地からすれば、状況はさらによくないものとなる。

もし一族ないしその支持者に権力の濫用があった場合、なんら個人的な権限を持たない代表は省長に事案を送ることになる。その時どうなるだろうか？　追求するために理事官は不正を働いた者をソンラで裁きを受けさせるためにそこに送る必要があるが、現地人行政官が判断を下すにあたって代表の送った書類があるだけである。裁判官の前で被疑者は急いで起訴事実の理由を認める。理事官ないし現地人行政官は証人を召喚するかその場で彼らを取り調べるかの二者択一になる。しかも理事官・現地人行政官ともに、15日以内の配置転換となるのである。このことは実際に一度起こったことがあるが、永続的な規則とは認められてはいない。

ソンラでは、裁判所は黒タイ族に属する官員から構成されている。すでに述べたように、デオヴァンチの一族全員が白タイ族への敵意をあらわにしている。

ソンラの官員による判決はライチャウの人々にとり不公平であると受けとめられている。

証人の召喚は村を出てから裁判所に入るまで、すでに述べたように極めて時間も費用もかかる。このような条件のもとで、ソンラへの旅行を避けるために、証人となることを求

められた者は皆なライチャウの代表に何も見聞していないと急いで述べるのである。それゆえ告発する側は告発内容を証言する証人がいないのを見て、被疑者の側の報復の対象となることを恐れついには自ら放棄してしまう。その結果証拠もなしに被疑者は無罪放免となる。このように、裁判官は越えがたい困難に直面し、むなしさを覚えるのである。じっさいライチャウを支配する裁判制度においては実際いかなる責任も課せられず、〔デオ氏一族にとっては〕お望みの体制となっているのである。

今、クワンダオによって創設された行政組織を検討するならば、情報にもとづき、以下のような状況を確認することができるのである。

課税

白タイ族は一般的に現金で地代を支払うことはない。しかし彼らはクワンダオに対して以下の負担を負う。すなわち米及びタバコ・棉花・ラミー・スティックラック等の生産物の三分の一を納め、月及び季節毎に10斤のアルコールを贈与する。

ライチャウを通過する商品に対して、クワンダオはその半額を徴収する。さらにライチャウにおいては、中国から輸入されるアヘンに対し10%、水牛一頭につき0.7ピアストル、ニワトリ一羽につき0.2ピアストル等々を徴収する税関が存在する。

クワンダオは同じように管轄区に賭博場を開設した。この賭場は主として一族のメンバーに対して半年間ごとに順番に開催される。賭博場の貸し手は1ピアストルにつき500サンチームを手当として徴収する。現在、利ざやをとっているのはデオヴァンチの弟のカムラーである。デオヴァンチの服喪中もライチャウにおいては特権を活用することが妨げられることはなかった。

徭役

健常な男子を抱える白タイ族の家族は、商業上の目的であれ行政上の移動の目的であれ、ライチャウからハノイまで、さらにライチャウからチョボまで、各3回分のカヌーのこぎ手を提供しなければならない。

カヌーは船頭とともに挑発される。各乗組員にはライチャウからチョボまでの場合一回の旅程につき3ピアストル、ライチャウからハノイまでの場合、7ピアストルが支払われる。

クワンダオが住民向けに購入する商品に対しては、現金で支払われず、主としてタバコや塩などの現物による。クワンダオの厳格な専売の対象となっているタバコ・塩には、増水時で最高1ピクル62キロにつき12ピアストル支払われ、6ピアストル以下に下がることはない。

さらに、地域で織られる綿布・絹布に対して課せられる貢租があるが、その負担は家族の成員の必要に応じて異なっている。

メオ族は一家族あたり4ピアストルを支払う。さらにクワンダオはすべての生産物及びアヘンの三分の一を現物で徴収する。

カーないしシャー人は家族ごとに2ピアストルを貢納し、ライチャウのクワンダオの住民ないしその一族、デオヴァンチが直接支配している村々の首長であるフィアーの家屋の建設・補修に必要な木材・竹・藤を提供する義務がある。

もし我々があまりに封建的なこの体制を終焉に導こうとするならば、省長の権力のみが唯一この目的を達成することを可能にすることは明らかである。

これらの負担は明らかに加重であり、住民が今日まで何とか耐えられたのは、クワンダオが家族のメンバーを厳格に統制し、理由なしに決められた挑発額を超過することを防いできたからである。

彼の体力が衰えて以来、それと同時に権力の濫用が為されるようになったが、クワンダオの死去した今、彼の兄弟や親族は、我々が干渉しなければ、かつてないほどこの地域から定期的に不当な利益をしぼりとろうとし、一人の省長の権威でさえ彼らの欲望の爆発を押さえるには不十分であろう。

さらにもう一つ忘れてならないファクターがある。それはライチャウのあまりに厳しい風土だ。最も近い市場から五日も離れ、まだ接触したこともない現地人のなかに身を置き、食糧も通信も極めて困難な地に住むことになる官員は、肉体的にも精神的にも不健康な気候の影響に抵抗できないだろう。

それゆえ私は以下の人員を含む省を創設すべきであるとの見解持つものである。

草創期の省組織：ヨーロッパ人の配置

行政官一名〜理事官
副官としての文官一名
警備隊長

すべての軍事業務が長引くことをタイ族が恐れていることから見て、現地人警備隊を創設することはよくないように思われる。無駄な支出であり、かつ評判のよくない制度なるであろう。

現在存在する補助兵制度を有効に活用したほうがよいであろう。彼らをグループに登録し、一定期間ないしは短期の軍務に交替で就かせることができよう。

警備隊長は彼らに射撃及び武器の操作について訓練を施し、軍務及び各班訓練を理解させる。それで大部分十分な

軍事指導となるであろう。約50名の警備隊を、省の首府と二つの州のそれぞれに15箇所配置すれば、治安を確保し軍務の必要を満たすことができる。兵舎として、しっかりした床・荒壁土を用いた壁・西欧風家具・莫蓙の備わったピロティのある家屋を建設すればよい。この設備は最初のみ必要である。理事官は地域の事情を知り実際の政治状況にあわせ、あまり両側が迫っておらず、結果としてライチャウよりも健康に良い場所を選び、そこに最終的な省都を創設することができるからである。

この省は当面クワンダオ支配地区、すなわちライチャウ・クウィンニャイ2州及びルエンチャウの郡区にだけ設立されることになろう。

その後で、ディエンビエン・トゥアンザオの2州を編入し、今日もそうであるように、代表の管轄下におけばよい。

なおライチャウからかなり離れ、かつソンラ州地区の北部にくい込み、デオヴァンチの直接支配下に置かれてきたゴクティエン社の問題が未解決であるが、ソンラ州に編入されるべきである。

現地人の問題

新たにできる省の現地人行政機構は以下のように組織されるべきである。

デオヴァンチの長男デオヴァンカンは地域の慣習に従い、父親に代わってライチャウのクワンダオとしての地位を世襲する。私には頗る健康状態がよくなさそうに見えるこの官員の寿命はあまり長くないようだ。将来クワンダオの地位を維持したくなくなった時は彼の死を待ってこの役職を廃止すればよい。他方、先に述べたカムラーと通訳のカンの企てた陰謀は、まだデオヴァンカンに自分の叔父たちに対して何らかの決断を下すには至っていないはずだ。それゆえ、新省長によって適切に処理され、彼らを正しい道に導くのを助けてくれるものと期待される。

クワンダオ以外に、ライチャウ知州には五ヶ月前に亡くなった前知州の息子のデオヴァンデー（タオデー）を任命した方がよい。この任命も現地の慣習に合致し、同様に人々の歓迎を受けるだろう。また、タオデーは我々の側から見ても頗る有用である。ライチャウの現在の里長でもあるデオヴァンクイとともに、省を設立する際に、理事官は最初に彼ら二人の官員に頼ることになるであろうから。もとのクワンダオの一族にあまりに近いとはいえ、タオデーとカムクイは、我々から見ても他のデオヴァンチの一族に比べ、すぐれた知性を持った活発な人物であり、臆することなく彼らの要求を何度も退け民衆の利益を守ろうとした。

現在のクウィンニャイ州の知州は、私の印象では、監視を行う必要がある人物である。彼はカムラーの党に服従しているからである。しかしながら、彼はしっかりした人物であり、地位を失うようなことはしないだろう。旧体制に代わる新たな状況を目にすれば、我々の側につくはずだ。ルアン・チャウの社長（サーチュオン）についていえば、何らかの武力を用いることで理事官当局の側につくだろう。この社の住民や隣接するディエンビエンフーの黒タイ族は、自らに重くのしかかる負担に違いが生まれることの説明を受けており、また、彼らにライチャウの監督を受けることを求めるにすぎないからである。

まず、新理事官は注意深く通訳のカムカンを監視する必要がある。彼はデオヴァンチ事件の中心人物であり、現在、カムラーの党に属しているようである。一族の他のメンバーが彼と連絡をとりあえるような隔離であることを報告されなければ、彼をライチャウから切り離した方がよいというのが私の意見であった。もし理事官が彼の行動にいかがわしい点があることに気づいたときは、彼を無理矢理ラオスの警備隊のポストにでもあてここから離れさせるしかない。

もとのクワンダオがこの問題に対してこれっぽっちも公にしなかったため、課税と夫役の観点から新たな省の収入に対して何らかの評価を行うことは資料的に不可能である。ソンラの主計局には606ピアストルしか支払われず、しかも実際それは我々に対する服属のあかしとしての貢納にすぎない。

ライチャウのクワンダオ支配区に対して以上に提案した組織によってのみ、すみやかに完全な成果をもたらし、この地域の住民に重くのしかかる不正を消滅させ、彼らを我々の側に惹きつけることができるのである。

デオヴァンチの一族が
ライチャウの地域に有する諸権利の性格

私はデオヴァンチの一族のすべてのメンバーに彼らが占有する土地に対して持つ世襲的な権利について尋ねた。さらに、彼らに水田ないしは他の作物栽培地の所有者であるかどうか質問した。彼らはきっぱりとこう述べた。固有財産としては、建物の敷地と一族の墓地とに供せられるライチャウの村の土地を所有するだけであり、彼らは作物栽培地も水田も持たない。クワンダオ支配区の土地は各村々に帰属し、使用にあたってそれらはすべてのタイ族地区における慣習法上の規則と土地の帰属する共同体の形式に委ねられている。これらの土地の一部はその用益権が世襲首長ないし村長に認められ、彼らのために住民によって耕作されている。彼らは役職を失うと、これらの土地は共同体に返還されるか、彼らの後継者に割り当てられる。しかし、官員はおろか他の住民たちも土地の一小片たりとも売却し権利を譲渡することはできないのである。

パヴィとの通信に関するデオヴァンチ一族の主張

続いてデオヴァンチ一族のメンバーにパヴィからクワンダ

オ宛に出された書簡ないしはクワンダオからパヴィ宛に出された書簡、さらにソンラやライチャウの郵便局で差し押さえられた書簡についての情報を提供してもらえるかどうか尋ねた。

デオヴァンカンとクワンダオの叔父たちは皆な公式に、パヴィないしクワンダオの息子たちが彼らに送ったすべての書簡を受けとっていると思うと述べた。私は何度もこの主張を繰り返させたが、彼らはつねにそれを確認し、故クワンダオの手紙がなくなっていることについては聞いたことがないと付け加えた。私はこの問題について通訳のカンを訊問してほしいとボスク氏に頼んだ。カンが答えるには、デオヴァンチはパヴィの手紙を受け取ったことがあるという。パヴィはそれ以前にもライチャウに書簡を送っていたことをそのなかでほのめかしているが、クワンダオは返事を出さなかった。カムカンは彼の叔父は手紙を受け取ったことはないと明言した。書留については、ハノイの郵便・電報局がパリからのデオヴァンチ宛の書簡がすべて送り手と受け手の側に送り返されたことを明らかにしている。しかし、通常の書簡については、郵便局に手紙の痕跡が残されないため、これ以上調査することは不可能である。さらに、デオヴァンチの秘書をつとめていた通訳のカンは、情報提供者として最適の人物ではあるが、より深い調査が可能となるような情報をいっさい提供しなかった。

ほかに、彼らとの会話のなかで、問題の書簡がソンラ理事官ないしライチャウ郵便局長によって差し押さえられたことを、クワンダオの兄弟・息子たちないし通訳が、瞬時たりとも気づかなかったようには思えなかったことも付け加えておく。

村長との会見
クワンダオ・ライチャウ知州の継承に関する彼らの意見

デオヴァンチ一族にさまざまなインタビューを行った後、私はクワンダオの直接の管轄下にあるすべての村落首長を招集した。13 名のうち 12 名の首長がライチャウにやってきた。私は彼らに以下の点につき、個人的に質問を行った。

1° ヨーロッパ人官員をライチャウに配置することについてどう思うか?

全員一致して代表の来訪はフランス式行政規則を知らない住民を怖がらせるだろう、と答えた。住民は規則を知らず知らないうちにそれに違反してしまうのでないか、というのである。住民はまた、同様に村の男子を徴用して警備兵を編成し長期にわたり軍事教練に従事させるのではないかと疑っている。

私はこうした反応には驚かなかった。高地の住民は長期間軍務につくことや運搬業務に従事することへのあらがいがたい反感を公にしている。さらに、ライチャウに代表が置かれると、デオヴァンチが政治的な判断から彼らに委ねた権益の一部を失なわざるをえないと釈明した。

2° この 5 ヶ月前に亡くなったクワンダオのデオヴァンチとライチャウ知州の後継者についてどのような意見を持つか?

12 名のフィアーのうち8名がタイ族の慣習的な権利にしたがい、亡くなった彼らの父親に代わり、デオヴァンカンをクワンダオに、デオヴァンデー（タオデー）をライチャウ州知州に任命すべきだとの意見であった。

他の4名は、この問題について意見を表明しなかった。彼らは単に、デオヴァンチの一族からクワンダオと知州を選出する労をフランス当局にとってもらいたいと答えただけであった。付け加えるならば、私は、朝に6名のフィアーに尋ねることができただけであったが、午後面会する予定であった他の6名は事前に招集され、まだ決めかねていた4名がそうしたように、カムラーから公式な回答をするよう命じられていた。2名はカムラーが彼の指示に従わない者を声高にののしるという威嚇を受けていたにもかかわらず，あえてその指示に背いたのだった。たぶん 12 名の村落の首長たちはそのようなことがなければ、クワンダオと知州の継承にかんして一致した回答をしたことであろう。

特に私は先に提起した問題にライチャウの里長であるカムクイが答えた頗る率直かつ勇気あるやり方に注意を促したいと思う。武器とアヘンの密輸について、カムクイによれば、中国からやってくる密輸業者をつうじてなされているという。もしこうした不正行為を抑止するためにデオヴァンチの一族が行政当局の命令に従わないならば、通常の犯罪者として追究する、と述べたところ、彼は、フランスの命令に違反した親族がいるのは残念だが、自分は義務を果たす、と語った。ライチャウに代表部が設置された後、住民は必ず保護政府と親しくなり、デオヴァンチが強制した補助的な貢納や夫役に従わなくてもよいのだ、と告げた。カムクイは負担が緩和され住民は嬉しく思うだろう、と述べた。私がさらに、クワンダオの一族が現在、大小合わせて百名からなり、しかもつねに増大しつつある。そのため、ライチャウにグループとして留まることはできず、彼らにとっても一部の者がライチャウ以外の地に居を定めるのは有益なはずだ、と述べると、彼は行政当局がそうした結果を出せるのであれば、住民にとって確かに有益であろう、と応じた。

カムクイとタオデーは、繰り返すが、クワンダオ支配区の現体制を変革しようと欲する我々の最もよき補助者である。

ライチャウ〜デルタ間の交通手段

ライチャウ〜トンキンデルタ間に存在する交通手段に関して、以下の情報を得た。

現在、黒河ルートとラオカイよりフォントーを経由しライチャウに至るルートとの二つのアクセスが存在するのみである。

黒河はよく知られ、長い間利用されてきた。黒河はチョボのダムからはカヌーでしか航行できず、しかも6月から10月末までは増水のため航行が大変困難となる。こうした不便さにもかかわらず、黒河は現在も、そして将来もながく唯一の交通路でありつづける。一定量の重要な商品がこの河川をつうじて運ばれるが、荷物を一定の大きさ以内に収めなければならない。

フォントーを経由しラオカイからライチャウに向かうルートは、軽量な荷物の輸送路と見なされている。このルートはバサットで紅河を下りて西に向かい、ムオン・フムを経由し、ナム・フー・タオ渓谷に出る。しかし、この渓谷を出ると、高い峠を越えてナム・ロー渓谷に下り、フォントーに至る。ここからライチャウに至るには二つの手段がある。一つは陸路でフォントーからナム・ロー川とナム・ナー川の合流地点まで行き、そこからカヌーでナム・ナー川を黒河との合流点に位置するライチャウまで下る。カヌーでフォントーからナム・ロー川との合流点まで出るという方法もあるが、小舟の大きさが極端に制限され、ごく少量の商品しか輸送できない。

ナム・ナー川の航行も同様に困難であり、この川を下るカヌーにかろうじて10ピクル積めるかどうかである。そのうえ、航行できないバクタンチャイの急流では積み替えを行わねばならない。

バサットからフォントー、さらにナム・ロー川の合流点までの陸路はよく補修され、5～6日で移動できる。ナム・ナー川を下るには最大で2日を要する。ハノイからライチャウまでチョボと黒河を利用すると最低でも15日かかるのに対し、ハノイからライチャウまで、ラオカイを経由すると、合計7～8日で済む。

第二の方法はフォントーから陸路を通ってライチャウにたどりつくというもので、雲南からやってくる中国人隊商の歩むルートである。

このため、若干西北に遡る経路をとってナム・ナー川をわたり、バン・ナム・クムの南数キロのところで隊商のルートに合流する。この地点からこのルートは南に下り、新たにバクタンチャイでナム・ナー川を越え、ターピンの平原（標高約700メートル）に至る。この平原を出発し、三度目になるがナム・カイでナム・ナー川を渡り、右岸に沿ってこの川を隔てる大きな山脈を越えてライチャウに至る。このルートを辿るとフォントーからライチャウまで約五日かかる。このルートは傾斜が急で石ころだらけ、雨期にはいくつかの地点でナム・ナー川があふれ、つねに通行不能となる。

この道は通常、フォントーからライチャウに至る商人ないし住民によって利用される。しかしターピン平原の麓にフォントーから一日で上記のルートに合流する小道があるという。住民から与えられた情報によると、この支線はつねにナム・ナー川の左岸にあり、上記のルートほど傾斜はゆるやかで砂利道ではないというが、このルートを利用した者を一人も見いだせなかった。ラオカイからライチャウまで9日で着けるので、このルートを調査させた方がよいであろう。

十分な調査を経ることなく、ハノイーライチャウ間の交通手段としてどれを採用すべきかを提言することは困難である。

これまで、ライチャウ向けの商品の輸送は、大変に不規則ではあったが、徴用したカヌーを用いてデオヴァンチが担ってきた。それらは、一般に自らの交易のためであったが、時には保護政府の物資輸送のためにも利用された。ライチャウ支配区の行政を担当するフランス人官員の場合も、徴用により同様に容易に輸送を行えよう。本人が望むなら、この業務に必要なカヌーを見出すことができよう。この地域のタイ族は徴用に対して直接代価を支払うならば、黒河の往復をいとわない。しかも、ソンラ理事官にはこの問題を研究し、報告してくれるよう依頼してある。

地域の経済発展は
フランス当局の直接的な行動しだいである

ライチャウ地域はあまり我々に知られていない。この目的を達成するためには、この地域を支配している不正に終止符を打ち、住民がおのれの仕事から利益を得られるようにするためには、この地域を独立した行政区とすることが必要である。この地域を発展させ経済状況を改善できるのは今しかない。

これまで住民は土地の生産物を取り引きする自由がなく、おのれの耕地を拡大させる努力をなんら払ってこなかった。彼らの労働能力や将来のこの地域が将来どうなるかを評価することは難しい。

アヘン密輸を抑止する方法

黒河流域を利用して展開しているアヘン密輸の問題について、収集可能なすべての情報をつかんだ。タイ族の大多数は吸引するにせよ生のまま食するにせよ、アヘンを使用する。

住民によって消費されるアヘンほとんどすべて雲南からやってくる。しかし、地域の高地に住むいくつかのメオやカー人の村ではケシの栽培に手を染めており、自家消費並びに首長への贈答用にのみわずかながらアヘンを生産している。

黒河をつうじてトンキンへ、そしてソンラ省の北部を越えソン・マー渓谷をつうじてアンナン北部（ヴェトナム中部）に将来される大量の密輸品は雲南からやってくる隊商によって運ばれる。この麻薬を輸入し取り引きしているのは中国人である。

これらの隊商は決してサムヌア地域より南に下ることはなく、そこでアンナンの密輸業者はアヘンを仕入れるのである。

すでに指摘したように、これらの隊商はライチャウへの通行権を購入する。

こうした状況をやめさせるために以下の手段を講じる必要があるように思われる。

1° 住民のアヘン消費に不安を与えてはならない。

2° この地域で流通するインドシナ専売総局のアヘン販売価格を約1テールあたり1ピアストルに値下げし、密輸によって輸入されるアヘンとほぼ同価格とする。アヘンは箱詰めよりもパン状の塊で販売することが望ましい。アヘンは住民から劣悪な水を摂取した結果発病する熱とたたかうための必需品とみなされているが、購入価格を値上げすることなくその消費を保証するならば、大量の密輸を抑止するという見地からも彼らの協力を求めることが可能となろうし、しかも喜んで協力を申し出るであろう。

3° 現地人警備隊・知州・村落首長の助けを借りて黒河及びソンラ省北部を越えるルートや小道、ほとんどのタイ族村落で遭遇する中国人に対する監視体制を組織する。そうすることで、最大部分の隊商が我々の領域に侵入するのを停止させることができ、まもなく専売総局がトンキンやアンナン北部で販売を増やすと考えることは十分可能である。

しかもソンラ省において密輸を防ぐうえで好結果を得ようとするならば、ラオスの行政当局は同様の監視を行う必要があろう。アヘンの輸送はもはやトンキンを経由することができないため、たぶん我が辺疆地帯をとりまきながらムオン・ウーのルートをとり、それによってそれほどの困難をともなわずにタインホア北部の山岳地帯に到達するであろうから。

実効性を高めるために必要だと考え提案した以上の方法を実践するには、省長の権力をライチャウに置くことが不可欠であると考える。

同様に私はソンラ理事官にこの問題に関する詳細な報告を行うよう依頼した。

要約

この報告のなかで私は調査をつうじて明らかとなった一連の事実を示してきた。ここで理事長官の4月1日付けの書簡（114c）の論議の対象となっている問題に答えながら、手短に概括しておくことにしたい。

1° デオヴァンチの死によってライチャウ支配区の秩序は混乱を来していない。

存命中の彼の権威は絶対的なものであり、住民にとってとりわけ重いものではなかった。彼は長い間一族のメンバーの尊敬を得るのに必要な活力を保持ししてきた。約2年前から、彼の健康が衰えると、息子や兄弟たちが多くの収奪を行うために不正に手を染めるようになった。その結果、住民の間に大きな不満を呼び起こした。

デオヴァンチの長男デオヴァンカンは、この地域の伝統にしたがい、父に代わってクワンダオとして受け入れられるだろう。しかし彼の叔父たちをあらゆる政務から遠ざけておくことが重要である。彼らはこの地域でひどく評判が悪いからである。

デオヴァンカンのほかに、クワンダオの他の子供たちは年齢ないし地域から離れたために、父の行動に協力したことは一度もなかった。じっさい、18歳から20歳までの二人の年長の息子をフランスで学ばせた。デオヴァンカンの弟で28歳の3番目の息子は白痴に近いため一族のなかでなんら役割を果たしていない。クワンダオはこのほかに二人の子どもを幼い年齢でなくしている。

2° デオヴァンチはライチャウの建物が建てられている土地と一族の墓地以外にはいかなる土地も所有していない。これらの財産の価値はライチャウの円い丘に建てられた家屋に帰着する。その価値を評価するのは困難だが、それほど多くはない。

すでに述べたように、とくに直接の子孫の場合はそうであるが、今ただちにこの一族のメンバーを追放するのは拙劣なやり方だと信ずる。この地域に通常の行政機構を導入し住民が抑圧的な負担から自由になるならば、デオヴァンチの親族は彼らの生活を維持するかほかに富を求めにいくといった合法的な商業を余儀なくされるか、それに身を委ねざるをえなくなるだろう。

3° すでに指摘したように、デオヴァンチのソンタイ省で租借地を獲得しようとする行動は、生活費の困窮に終止符をうつためにクワンダオによって採用された延命策であり、クワンダオ自身及び彼の一族はわがバヴィの地に定住するためにライチャウを抛棄しようなどという意図を全く持っていないと思われる。

デオヴァンチ側が一族の一部を強制的にライチャウの地から離れさせることを打診してくる可能性はほとんどないだろうと思う。それゆえデオ氏一族を援助し、彼らが他地域に集団移住するのを促すことは我々の義務であろう。このような条件のもとで我々が干渉することはそれほど重い負担にはならないと思われる。

4° 交通路・輸送手段及び地域の経済発展、アヘン密輸の抑止の問題についてすでに示してきたことについては、できるだけ簡潔にこれらの問題を扱ったので、特に要約をしな

い。

5° 一族メンバーの証言では、デオヴァンチはモンペイラ氏が保持した公的私的な関係に特に不平を述べなかったという。ソンラ理事官の政策は明らかにクワンダオのそれとは異なり、時に古い首長の自尊心を傷つけるものであったが、もしモンペイラ氏がいくつかの権力濫用に終止符をうち、ライチャウからくる大量の密輸輸送団を防ごうとしたからといって、クワンダオの利権に打撃を与えたというのは正しくはないだろう。ほかに、パヴィが書簡を送りかつデオヴァンチがそれを受領した問題についてのいかなる情報も現地で収集することはできなかった。トンキンにとどいたデオヴァンチ宛のすべての書留便は、領収書を提出させたうえで、彼に戻された。書留になっていない書簡については行方を突き止めることは不可能であり、それらが目的地に届いたか否かを知ることは出来ない。

報告書をおえるにあたり、ライチャウ地域は現在まで我々の影響から完全に免れてきたのであり、我々に課せられた任務は、信頼をかちえて好感を抱いてもらえるよう住民たちを我々に接近させることである、と申し上げたい。

省を創設することは、つまりはクワンダオ支配区にフランスの権威を確立し、この地域を道徳的に征服するための最も確かな手段であるように思われる。

我々はこの新しい省が将来、黒タイ族の住む地域よりもより重要な経済発展が約束されるであろうことを期待することさえできよう。

ライチャウの白タイ族は身体が大きくかつ頑健で逞しく、黒タイ族よりはより直接的に影響を受けている中国人に近いようである。

以下のように考えるのはもっともなことである。すなわち、中国人のように、彼らは確かな商業的才能を持つとともにそれを活かす活動を行っており、それは無気力でラオス人に近い黒タイ族に欠けているものだ。

注

(I) Rapport de M. Miribel sur son voyage de Hanoï à Lai Châu et sur la mission dont il est chargé, Dossier Deo Van Tri, RST-AF/56475.

参考文献

Brebion, A.

1935 Dictionnaire de bio-bibliographie générale, ancienne et moderne de l'Inodochine française, Paris, Société d'éditions géopgraphiques, maritimes et coloniales.

Le Faillier,Philippe

2008 La Rivière Noire: l'intégration d'une marche frontière au Vietnam, version Août 2008, à paraître.

武内房司

2003 「デオヴァンチとその周辺〜シプソンチャウタイ・タイ族領主層と清仏戦争」塚田誠之編『民族の移動と文化の動態〜中国周縁地域の歴史と現在』風響社、645-708 頁。

2006 「20 世紀初、ヴェトナム西北タイ族社会の変容と抗仏運動」塚田誠之編『中国・東南アジア大陸部の国境地域における諸民族文化の動態』(国立民族学博物館調査研究報告 63 号)、285-298 頁。